

翻刻「恐ろしき錯誤プロット」

塩 井 祥 子

〈解題〉

「恐ろしき錯誤」は乱歩の三作目の小説として大正十二年の『新青年』十一月号に掲載された。「二銭銅貨」、「一枚の切符」と違い、自身の小説が認められてから初めて執筆した小説であり、乱歩自身も『探偵小説四十年』において、「私の全作家生活を通じて、一番乗気になって、書きたくてたまらなくて書いたのは、恐らくこの作であったといってもよいと思う」と述懐している¹。しかし、「私が小説家として未熟であることを曝露したような結果」とも述べている²。「恐ろしき錯誤」は大正十二年六月には完成していたが³、実際に掲載されたのは十一月号であったことから、乱歩はこれを「森下さんに長い間握りつぶされていて」と考

えたらしい⁴。つまり、あまり出来が良くなかったために後に回されたと思ったのである。実際の森下雨村からの評価は記録がないために不明ではあるが、そういった事情が乱歩の自作「恐ろしき錯誤」に対する評価を厳しくしたのかもしれない。

乱歩以外の同作に対する評価は、中島河太郎の「証拠の残らない犯罪に対する復讐を、トリックを弄してなし遂げようとした男を描き、その偏執狂的な術策が、かえって自分の墓穴を掘るようになる本篇は、心理闘争への興味をいち早く示したものとして注目されよう」⁵、高木彬光による「ここにあらわれた心理闘争のすさまじさが、後日の数々の名作に通じるものがあることはいうまでもない」などが主だったものであり⁶、あくまでも後の作品群の習作として

の評価であり、この作品を主とした評価については未だ充分とはいえない状況である。

資料「恐ろしき錯誤プロット」⁷は、「発書簡控大正十二年五月六月」と題されている冊子の中にある友人・井上勝喜⁸にあてて書いた六月七日付の手紙の中に書かれたものである。複写式便箋、一ページの行数は十一で、縦書き。原本はなく、控えの薄い紙に複写されている。手紙は乱歩の近況報告から始まり、「一枚の切符」が『新青年』の七月号に掲載されることも伝えている。その後六月中にかけてと言われた小説のプロットを一寸書いたので批評してくれと言いい、プロットを九つの項目にわけて提示している。余談ではあるが、この手紙の後も、乱歩は「恐ろしき錯誤」に関する批評を井上に乞うたらしい。その部分についての乱歩の発書簡控は残っていないが、乱歩の手紙に応えたと思われる井上からの手紙が残っており、確認できるだけでも六月二十一日、六月二十二日の二通がある。乱歩がこの作品執筆に相当な熱意を持っていたことが窺えよう。

資料の内容面について述べる前に、「恐ろしき錯誤」のあらすじを簡単に紹介する。主人公である北川は火事と見せかけて証拠の残らない方法で殺された妻の無念を晴らす為に奇怪な復讐を思いつき、犯人と目するかつての恋の競争

者である野本を追い詰めようとする。しかし、証拠に基づくかぬ推理であるため、本当に殺人はあったのか、それとも全て北川の妄想に過ぎないのか判断がつかないまま進行し、あるきっかけから北川が発狂、その直接の動機として「脳髓の盲点」なるものが挙げられる物語である。

以上が初出の内容であるが、このプロットは、途中までは初出と共通しつつも（語られる順番ではなく、作中の出来事の因果関係においてである）、北川に相当するAが発狂した後、越野に相当するBの語りが始まり、偶然的の機会を利用してAの妻を証拠の残らぬ犯罪で殺害したこと、そしてそれを他人のこととして話し、妻の死で動揺しているAに暗示を与え、奇怪な復讐に走らせたことを告白する。しかし、ある日、荷物を整理した際、Aの妻からの手紙が暗号となっていると考え、それを解読する。実はAの妻は自分に惚れていたのではないかと思うも、死人に口なし。Bは永久に解くことができない疑を抱き苦悶する。Aの発狂もBの苦悶もすべては「些細な錯誤」のために引き起こされたのであるという幕引きとなっている。

初出において明らかにされなかった妻殺しのトリックと犯人について言及されており、これだけでも非常に興味深い資料であるが、それだけにとどまらず、このプロットは

「恐ろしき錯誤」の成立過程について、二つの重要な示唆を与えてくれる。

第一に、「恐ろしき錯誤」の草稿状況について。以前『大衆文化』において落合教幸が紹介した様に、この作品には二種類の草稿が存在する。これらの草稿について落合は、草稿2については「内容は発表されたものに近い」と紹介し、草稿1については「書かれているのは、ある作家のもとへ届けられた書簡ということになっている。そこには犯した罪の告白が書かれていると説明される。作家へあてた告白文という形式はのちの「人間椅子」を想起させる」と述べている。ここで問題なのは、初出とのストーリー上の相違点がありえない草稿2に比べ、草稿1は初出との相違点が多いことである。草稿1において、北川に相当する人物は古林という名前になっており、初出と同じく妙子をめぐる恋の競争があったことが示唆される。しかし、何らかの事情により、古林は発狂し、語り手である豊公も「ある恐れ」に責め苛まれている、という内容となっているが、初出と大きく違うために、この草稿1が「恐ろしき錯誤」の執筆過程においてどの段階の草稿であり、どう位置付ければよいのか見当がつきにくいという問題があった。

しかし、プロットの存在によって、草稿1、2の前後関

係を特定するまでには至らないが、初出と大きく違うために正体不明であった豊公という人物がプロットで言う所のBつまり越野に相当することが了解できる。となると、草稿1の豊公がいう「ある恐れ」とはプロットに示されている「死の疑として永久に解くときなき苦悶をつゞける」が為のものであると考えられるのである。つまり、草稿1がどのような話を書こうとしての草稿であったのかを解明する一助となっているのである。

第二に、作品をとりまく状況について。「恐ろしき錯誤」の初出の附記に次のような一文がある。「初め、作者は越野氏の事件に重点を置くつもりだった。併し、作者はこゝまで書いて来て、ふと気が変った。越野氏の事件はそれだけを切離して一つの小説にした方がもつと面白いものになるといふ気がして来た。それと、一つは時間のなかつた関係もあつて、この話は兎も角これでお終ひにすることにした。さういふ訳で、この話には全体に互つて越野氏の事件に対する伏線が敷かれてあるので、(中略)越野氏の事件は多分『赤い部屋』と題して発表することになるだろう」とあり、最初どのような物語が予定されていたのか資料的裏付けが乏しかった。

しかし、プロットの存在によって最初重点を置くつもり

だった越野氏の事件とは、証拠の残らない犯罪のことであることが確認できた。だが、実際にはこのプロットは採用されず、初出は北川の発狂で終わっており、証拠の残らない犯罪の存在を示唆しつつも、その解決が与えられないため、作品は北川の発狂の過程を中心に描くものとなっている。これらのことから、執筆過程における中心テーマの変更改があったと考えることが出来るのである。

この作品のテーマについては、乱歩は「恐ろしき錯誤」執筆前の大正十二年四月二十三日森下雨村宛書簡に「是非、その内書いてみたいと思っているのは、「ある発狂の動機」とでも題すべきもので、アンドレーエフの出世作だとして、古いストランド誌に訳載してあった“Was he mad?”という様な種類の、心理的探偵小説とでも云えば云い得るものです」という発言をしている¹⁰。プロットと前述の乱歩の執筆動機を踏まえるなら、証拠の残らない犯罪と「ある発狂の動機」が執筆のある段階まで両立しつつも、いずれかの段階で初出の中心となっている「ある発狂の動機」に至るまでを描くものとして整理されていたと考えることが出来る。であるため、「恐ろしき錯誤」と執筆過程であるプロット、草稿群を考察する際は、両立していた二つのテーマがいかに「ある発狂の動機」に至るまでの過程を描くも

のに収束していくのかを探ることが不可欠な作業になってくると考える。このようにして初めて、未だ位置づけを欠いたこの作品の意義を発見することにつながるのではないだろうか。

この点については、乱歩の執筆時の小説に対する問題意識や、影響をうけたと考えられる「Was he mad」を視座としながら、別稿にて論じる予定である。

【注】

- 1 江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第二八巻探偵小説四十年（上）』（二〇〇六年一月二〇日発行、光文社）、七二頁
- 2 江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第一巻屋根裏の散歩者』（二〇〇四年七月一四日発行、光文社）、一二四頁
- 3 初出「恐ろしき錯誤」に「一二、六、二九」とある。
- 4 江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第一巻屋根裏の散歩者』、一二四頁
- 5 中島河太郎「第一巻解題 二銭銅貨」、『江戸川乱歩推理文庫一』（一九八七年九月二五日発行、講談社）、三三四頁
- 6 高木彬光「解説」、「屋根裏の散歩者」（一九九四年四月一〇日発行、角川書店）、四〇五頁
- 7 資料自体に「恐ろしき錯誤プロット」という名前がつけられているわけではないが便宜上このように称することとする（ただし、乱歩は手紙の中でプロットであることは明示しており、その時点での

タイトルは「些細なる錯誤」であった。

8 井上勝喜は鳥羽造般所時代の同僚。探偵小説好きであり、乱歩は二人で探偵小説雑誌を出版しようとするなど交流が深かった。

9 落合教幸「翻刻」「恐ろしき錯誤」草稿、「大衆文化」(二〇一五年三月二五日発行、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター)、八四～八五頁

10 江戸川乱歩「森下雨村宛大正十二年四月二十三日付」、「書簡対談 座談」(一九八九年四月一〇日発行、講談社)、三五頁

【凡例】

翻刻にあたって旧字は新字に統一した。

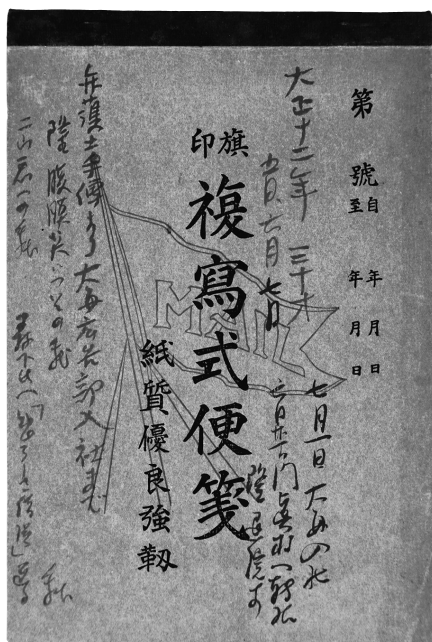
■は塗りつぶし

■は筆者が判読できなかったことを示す

□は挿入部分

□は削除部分

現在の観点から見れば適切でない表現があるが、著者にそのような意図はないこと、資料の正確性を期すためそのままの表記とした。



そつひ、そのフタサトを一寸書え入る。何とか
おぼす。

(1) 有り難いもの A と云ふ字がある。善女弟と嫁り
再婚である。姉弟は相互に憎むのである。人々がそれ

也。長和自負一人之志。學究先生以爲夢中。以爲
 乙爲。別事。はま。乙。可。飲。有。知。

(2) ある時隙、東のふと、△は、女中や左のBに
手付て、其の正に指示を左のBにする。此のとき、

多のかつくと△と一
 段の主係とある要か
 此のやうである。

(3) 夢の如く人の夢に一瞬に蘇る。元々

夢のなかには平んがぬ。夢のなかには

りてつて有る。そして又その内々的なものがある。それは、
 子孫を養ふに生ずる。別あたかもものもあつてある。

(4) 多分、 B が A の中心の例に A と

与と友人といふ男の何れか一人と云ふ事。
 Aは持てゐる友人は、Bの言ふ如く、とCの解

ひもあり、Dの和のひもより、Eの和のひもより、三人の中
誰かとひもをつなぐ、その中の誰か一人にのみきりしめる。

併し、その主人は主人若くはAの要に對して常々あるべき
の競争の對中であつた。それ故にAは少く

(1) 余り豊でないAといふ学者がゐる。恋女房と独り

赤坊がある。女房には極度に惚れてゐるんだが、それを左程自覚してゐない。学究生活に■夢中になつ

てゐる。家事にはまるで無頓着だ。

(2)ある時隣家から出火。Aは女中や〔親〕友〔人〕のBに

手伝つて貰つて品物持出しに奮闘する。沈火の後

気がつくとAと一所に立働いてゐた妻が火の中で

焼け死んでゐる。

(3) 妻の死によつて、Aの〔潜在的〕恋が一時に勃発する。

亡き妻

恋しで夢中になる。学問などは手につかぬ。妻のこと計

り考へてゐる。そして考へてゐる内に段々妻の異様な

る死を疑ひ出す。別段大切なものも残つてゐない

火の中へ何故妻が飛び込んだかを疑ふ。

(4)ある時、Bが火事の時の話の中で、〔Aの〕妻の側にAと

Bとの友人らしい男が何か話してゐたと告げる。

「Aとはその」その友人は、Bの云ふ所によるとCの様

でもありDの様でもありEの様でもあり、三人の中

誰れとでも考へられ、その中の誰れだかハッキリしない

併しその三人は三人共Aの妻に対して嘗つて恋

の競争の対手であつた男だ。そこで、Aは少し

No. 11
 人の変態的綿密を以て徐々に進めて行く。最も疑の軽いものから試みを始める。そして二人は何も知らないことを確める。最後に残つたのはCだ。Cこそ妻の讐だと確信する。ある時Cに逢つて何かのキツカケからかう話す。「俺の妻は、「子供は二階にゐる」との一言によつて火中に入つて死んだ。その一言は妻の復讐者の吹の言葉であつた。併し君、恐ろしいことだが、その復讐者は只一つの些細な錯誤に陥つてゐた。といふのは、俺の妻はひそかにその男に惚れてゐたんだ。何といふ皮肉だらう。その証は近頃発見したんだが、これ見よ。この時計の裏の写眞は何を語るだらう」と、その写眞は

No. 10
 Aが用意した所のCの寫眞を看んだ。Cは改作した色畫であつた。Aは勝利の叫びを上げて歸宅する。
 (7) Aは勝利の歓喜に燃えてゐる。そんな残つた不用の時計をまさぐり乍ら妙計にほくそ笑む。そしてゐる内に、フト変てこなものにぶつつかる。おかしいなといふ気がする。はては怖わさにブル／＼と身ぶるひする。そこへCからの使が来る。手紙を読むと、「時計を御忘れになつた様ですから使に持たしてやる。あの時は突然の腹痛で失礼した」とある。時計を見るとそこにはCではなくて

人の変態的綿密を以て徐々に進めて行く。最も疑の軽いものから試みを始める。そして二人は何も知らないことを確める。最後に残つたのはCだ。Cこそ妻の讐だと確信する。ある時Cに逢つて何かのキツカケからかう話す。「俺の妻は、「子供は二階にゐる」との一言によつて火中に入つて死んだ。その一言は妻の復讐者の吹の言葉であつた。併し君、恐ろしいことだが、その復讐者は只一つの些細な錯誤に陥つてゐた。といふのは、俺の妻はひそかにその男に惚れてゐたんだ。何といふ皮肉だらう。その証は近頃発見したんだが、これ見よ。この時計の裏の写眞は何を語るだらう」と、その写眞は

Aが用意した所のCの寫眞なんだ。Cは話中ばかり色青ざめて、うつぶす。Aは勝利のかちどきを上げて歸宅する。
 (7) Aは勝利の歓喜に燃えてゐる。そして、残つた不用の時計をまさぐり乍ら妙計にほくそ笑む。そしてゐる内に、フト変てこなものにぶつつかる。おかしいなといふ気がする。はては怖わさにブル／＼と身ぶるひする。そこへCからの使が来る。手紙を読むと、「時計を御忘れになつた様ですから使に持たしてやる。あの時は突然の腹痛で失礼した」とある。時計を見るとそこにはCではなくて

No. 11
 Dはさう考へてゐる。それはさういふやうにAは自ら
 こゝろを洩す。そして狂氣して行くことを半ば意
 識しつゝつたやうに発狂してゐる。ほんと
 うに狂氣を発せぬやうに半狂人か、半狂人か、
 (8) さう、とBが云ふ。それはAの独白に於て、
 Bの独白に於て。Bこそ「Aの妻に鞭打つてゐる
 ゐた」と云ふ。さういふやうに考へてゐるやうに
 Aの考へるやうに考へてゐるやうに打つたことを
 考へてゐる。復讐しやうとする。だからAの考へ
 ゐたことは、火事の時手伝ひ乍ら、半ば氣まぐれに
 「子供は二階に居る」を用ゐたのである。それが予想以上「奏」効し

No. 12
 した。次にBはその話を他人のこゝろにAに洩す
 ゐたことを考へてゐる。さういふやうにAはまじめに暗示を
 受入る。そして狂氣になる。Bの復讐は何の疑をも残さず美
 事に恋の仇二人をなぎものにする。Bこそは勝利者である
 と歡喜する。(9) ある時、Bは手紙を整理してゐて、恋の
 Aの妻の考へるやうに、死屍に鞭つた殘忍の快感
 を考へてゐる。ハガキ計り結婚後はハガキ計りで
 數通ある。読んでゐる内に妙なことに氣づく。日附をアル
 フアベットの順を示すものとして、解いて見ると、「私は汝
 に惚れてゐる」となる。さては「と」思ふ。彼女

Dの写真が笑つてゐる。それを見てゐる内にAは變てこな
 笑ひを洩す。そして狂氣して行くことを半ば意識し乍らつ
 いに本當に発狂してゐる。ほんとに些細な錯誤が彼を半
 狂人から真狂人にする。(8) さて、とBが云ふ。それまで
 はAの話だが、それからBの独白になる。Bこそ一番Aの
 妻に惚れてゐたのだと告白する。そして一度は自分になび
 いた彼女が、Aの学者的な所に惚れて寝返り打つたことを
 極度に怒る。復讐しやうとする。だがそれはAの程真剣で
 はない。火事の時手伝ひ乍ら、半ば氣まぐれに「子供は二
 階に居る」を用ゐたのである。それが予想以上「奏」効し
 たのだ。次にBはその話を他人のこゝろにAに話すいた
 づらを思ひつゝ。そして話す。Aはまじめに暗示を■受入
 れる。そして狂氣になる。Bの復讐は何の疑をも残さず美
 事に恋の仇二人をなぎものにする。Bこそは勝利者である
 と歡喜する。(9) ある時、Bは手紙を整理してゐて、恋の
 ね返り者Aの妻■からのハガキを、死屍に鞭つた殘忍の快感
 でまゝとめて読み返す。「ハガキ計り」結婚後はハガキ計りで
 數通ある。読んでゐる内に妙なことに氣づく。日附をアル
 フアベットの順を示すものとして、解いて見ると、「私は汝
 に惚れてゐる」となる。さては「と」思ふ。彼女

No. 11

は、一度はAに惚れたが、一緒になつて見ると、Aの学究
 的にて「非」家庭的なのに愛をつかし、やはり「道」樂
 者のBが好きになつて、ひそかに意中を洩したのではない
 かと考へる。BはAの親友なのであからさまにして
 はねつけられ、Aに告げられることを恐れての仕業とすれ
 ば辻褄が合ふ。Bは苦悶する。復讐したと思つたのはあべ
 こべであつたのかと思ふ。
 Aに話した作りこどこそ、真実のことだつたのかと
 戦慄する。死の疑として永久に解くときなき
 苦悶をつゞける。それも極めて些細な不注意
 に騙されたのである。

(早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程)